立命館大学
国際平和ミュージアムだより
KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY
Vol.28-2（通巻82号）　2021.1.15発行

新年のご挨拶

吾郷　眞一（国際平和ミュージアム館長）

新年おめでとうございます。と言いましても、希望に満ちた新年をすがすがしい気持ちで祝うという雰囲気ではありませんね。感染の被害にあわれた方々にお見舞いの言葉をおかけすることから始めなくてはならないという閉塞感に満ちた正月です。来年こそは本心からおめでとうございますという言葉で始めたいものです。

2020年はコロナに明けコロナに暮れた一年でした。初期の予測に反し、このパンデミックの猛威は長期にわたる様相を呈してきています。欧米と比較すると、死者数は少ないですが、いつどこで爆発的に増えないとも限らないという懸念があるため、すべての社会経済活動が委縮しています。グローバリゼーションの負の側面を強く感じます。昨年２月の段階で、ミュージアムが感染真最中の中国の、活動を中止せざるを得なくなった親しい博物館に対してお見舞いのメールを発出しましたが、内心、今にこちらも同じような状況になるだろうという気持ちはありました。案の定、向こうは比較的早く抑え込みに成功しましたが、当方は３月以降、大きな第一波に見舞われ、逆に南京のほうから、お見舞いにダンボール箱いっぱいのマスクを寄贈いただき、感激しました。

コロナ禍で生じた各種問題から、いろいろなことを考えさせられました。まず、我々大学人として最も気になったのが、教育研究への影響です。授業は対面式からネットを使った遠隔方式に変わり、それに係わる多くの問題を発生させました。９月からの学期は、立命館大学ではかろうじて限定的に対面式が採用されるようにはなりましたが、まだまだキャンパスに元の活気は戻っていません。遠隔授業でなんとかまかなっているとはいえ、やはり学生がいないキャンパスは本来の姿ではないです。親元が経済的に困窮し、アルバイト口も減った学生諸君を救済する手立ても講じられました。しかし、もっと長期化すると問題はさらに大きくなります。

大教室の講義も、私たちミュージアムもほぼ半年間の閉鎖を余儀なくされ、９月から限定開館はしたものの、団体見学者を制限していることから、一番の「お得意さん」である小中高校生の来館がなく、寂しい限りです。急遽WEB展示を準備はしたものの、博物館は「一見は百聞にしかず」の世界ですから、いくらバーチャルで補おうとしても、そこには大きな壁があります。また、基本的に入館料で経営を支えている博物館のなかには、完全閉館を余儀なくされるところもあると聞いています。

第10回国際平和博物館会議企画〝マンガ・パンデミック展〟投稿作品から　作：安斎育郎氏

コロナ禍のもう一つ大きな負の影響は、二極化現象の増幅と、コロナ差別の出現です。自然災害や伝染病は人を差別しないと考えられていますが、そうではありません。ニューヨークでの死者数が低所得者層に特に高いことが話題となりましたが、仕事を遠隔に変えることができないいわゆるエッセンシャルワーカーの人たちは、感染のリスクが高いのは明らかです。にもかかわらず、失業・収入減という経済苦と、感染した場合には忌避されるという二重の差別を被っています。犠牲を覚悟で治療にあたる医療関係者に対してさえも差別的言動がみられることには、人はそこまで浅はかなのかと言葉を失います。ユネスコ憲章の前文に「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という有名な文句があります。平和の基礎は、人ひとりひとりの人権が守られていること、という私たちミュージアムが標語にしている「戦争がなければ平和でしょうか」という問いかけに対する答えは、まさにコロナ禍のなかで現実味を帯びてきます。

重苦しい新年のご挨拶になりましたが、立命館憲章を想起し「未来を信じ、未来に生きる」の精神をもって、皆さんと一緒になってこの難局を乗り越えていきましょう。

地球時間

当館２階の常設展示は、その性質上、防空頭巾とか手りゅう弾といった物資料があまりなく、写真、ポスターとそれに関する説明文という構成が主です。入って右手の壁に、ほぼ出口まで10メートル以上続く「地球時間」の年表は物に近いポスターと言えるでしょうか。この長～い年表の面白さは、地球誕生から現在に至るまでの46億年という時間を、最後の一年とダブらせ、その最後の最後の0.04秒に現代史が展開している、ということを面白く説明しているものです。しかも、その一年は京都の一年ということにしているため、祇園祭や葵祭といった京都の年中行事が季節の目安として書かれているのが特徴的です。

この年表が言いたいことは、人類の登場が、地球にとってはごくごく新しいことであるのに対して、その最後の瞬間でその人類が地球を破滅に至らしめようとしているということです。環境破壊や戦争、特に核戦争などというのは愚の骨頂であることが体感できます。学生時代に読んで感銘を受けたF. シューマン（長井信一訳）『国際政治（上・下）』（東京大学出版会, 1973年）の序章をほうふつとさせます。そこでも、長い地球という歴史の中で、我々が歴史とよんでいるものは、ほんのわずかな部分でしかなく、人類はなんとつまらぬ紛争に明け暮れてきたかということが描かれています。その感覚を持ちながら、２階の「平和をもとめて」の他の展示をゆっくり見てほしいと思います。

地球歴史年表

新任のご挨拶・展示資料紹介

本年度から当館の副館長に就任いたしました金森絵里と申します。立命館大学経営学部で会計学を教えています。現在の研究テーマは「エネルギーと会計」です。2011年の原発事故を機にこのテーマに取り組み始めました。原発事業の会計制度や、原発事故の費用負担・債務認識を扱っています。当館は世界初の「大学立の総合的な平和博物館」という、たいへん貴重な存在です。そのような歴史ある重要なミュージアムに関わることができて大変光栄に存じます。初心者で至らぬ点が多くあると思います。みなさまからのご指導・ご助言をいただければ幸甚です。どうぞよろしくお願いいたします。

今回ご紹介させていただく展示資料は２点あります。１点目は、あるご夫婦が共同で書かれた１枚の色紙です。夫が書いた文に、妻が絵を描き入れたものです。「まがつびよ　ふたゝび　こゝに　くるなかれ　平和をいのる　人のみぞこゝは」と書かれた文に、広島の原爆ドームの絵が添えられています。「まがつび」は漢字で「禍津日」「禍つ火」と書き、禍害・凶事などをひき起こす神とも原子爆弾ともいわれます。ご夫婦は日本人初のノーベル賞受賞者の湯川秀樹さんとスミさんです。この色紙は、一流の科学者である湯川さんが妻とともに平和への祈りをこめたものです。科学性と人間性が同居している、ひとりの人間のなかで統一されている、ということは、実は、当たり前のことではありません。特に今日、科学者は「科学的であること」を過度に求められ、「人間的であること」を過小評価される傾向にあります。例えば、科学者は、若いうちは科学者としての地位を確たるものにするための競争を強いられ、自分の夢や好奇心に沿った研究ではなく、非常に狭い専門領域における競争優位な研究成果の蓄積に邁進します。いったん科学者としての地位を確保すると、今度は「専門家」として様々な社会的意志決定に「正統性」を付与する役割を期待されるようになりますが、その正統性はあくまでも科学的な訓練を積んだ「専門家」による客観的な証拠（客観性）によって担保されると考えられており、かならずしも豊かな人間性（主観性）が求められているわけではないのです。これらの結果、今日の科学者のなかには、内なる人間性を抑圧したり忘却したりする人が少なくないように思います。湯川夫妻の色紙は、科学者が人間らしくあることの重要性を提起しているように思います。インド独立の父マハトマ・ガンディーは「７つの社会的罪」の１つとして「人間性なき科学」を指摘しました。大学における教育に携わる一員として、「人間性ある科学」の教育の重要性を改めて思い起こしました。

２点目は、上述のような観点から、個人的に「あたまではなくこころで」気に入った１枚です。７歳の息子がいるのですが、彼が好きそうだなと思った作品を選びました。輝く太陽、羽ばたく鳥、駆ける馬、ジェットコースター、おもちゃの家、爽やかな風を感じられる素敵な作品です。国際平和ミュージアムに訪れた際に是非見ていただけたら嬉しいです。

（国際平和ミュージアム副館長：金森絵里）

色紙「まがつびよ　ふたゝび　こゝに　くるなかれ　平和をいのる　人のみぞこゝは」

友禅型染め屏風「子供には平和を」（遊園地）

学生スタッフ　活動記録

２階展示学生スタッフ編

２階に訪れた際に是非見てほしい展示は「平和創造展示室」第１室の６枚の写真です。これらは現在もまだ世界中で起きている出来事を撮ったものです。

食料問題、水問題、児童労働問題、こども兵士、移民問題、地雷での被害など、身近な問題から普段身の回りでは見かけないような問題まであります。

例えば、「飢えでやせおとろえた子供」の写真は、飢餓問題を映した１枚です。

写真のこどもは、あばら骨が浮き出ており、１人で立つこともままならないような状態であることが見て取れますが、これはこのこどもが十分に栄養を摂れていないために起こります。このような飢餓状態にある人は、世界中で9人に１人いることになります。その一方で、日本では年間2500万トン以上の食糧が捨てられています。食糧がなく苦しんでいる人がいる一方で、多くの食糧が捨てられている、このような現状を本当に平和と言えるのでしょうか。

写真を通して、世界で起きている出来事を身近に感じ、「戦争がなければ平和なのか」という問いを考えていただければと思います。

同時に自分の普段の生活を見直すことは、様々な社会問題の解決のため、自らできることを考え、行動することに繋がります。

２階の展示物の説明は、私たち学生スタッフが行っています。

展示物（さいころ）などの説明を聞くことで、展示をより詳しく知り、より身近に感じることができる良い機会になると思います。

2階展示室にお越しの際は、ぜひお声掛けください。

（学生スタッフ：苑田東那）

２階常設展示　第１室「暴力と平和を考える」

ボランティアガイドコラム

地階常設展・沖縄戦のコーナーに巻紙に毛筆で書かれた達筆の遺書があります。一見して学識の高い人が書いたに違いないと確信できるほどの立派なものです。戦死を覚悟して出征前に家族宛てにしたためられた遺書です。初めてその遺書を読んだ時、目を疑いました。30年ほど前に研究会で度々顔を合わせた吉坂大慈さんの寄贈だったからです。

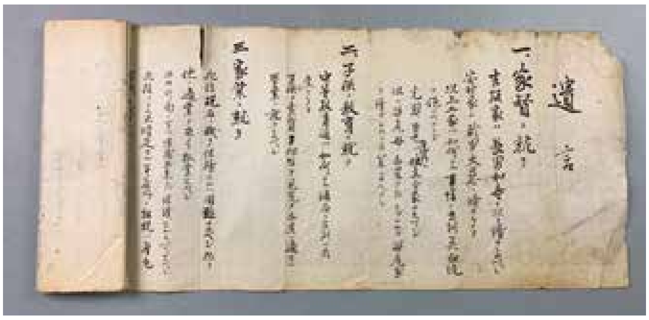
お元気であることを願いながら、お電話しました。以下はその概略です。

「父親は山口県出身で長州藩吉田松陰等の影響を受けて、国のために役立つのが誉と信じていた。母、妻、息子５人の父親。病弱なため召集令状が来なかったが、ラジオ屋を経営していたため、通信兵なら役立つことができるのではと、昭和18年に自ら志願して福山連隊に入り、満州へ赴く。病気になって門司周辺にある陸軍病院へ入院した。退院後、自分の意志で福山連隊を追って沖縄へ行く。終戦2年後に沖縄での戦死の知らせが家族に届けられ、仏壇に保管してあった遺書を家族で読んだ。母は郵便配達や自分の着物をお金に換えたりして再婚もせずに、本当に苦労しながら5人の子どもたちを育てた。ミュージアム開設にあたって寄贈した。」

大慈さんは温和で物静かな人、一方平和へのゆるぎない強い信念のもとでの行動は経験に裏打ちされたものだったのです。敗戦当時８歳だった次男の大慈さんはどんな思いで育ったのだろうか。父の戦死で辛酸をなめる生活を強いられただけに、父を理解しようとする大慈さんの心の葛藤が私には感じ取られ、戦争が彼にもたらした大きすぎる影響に返す言葉はありませんでした。

ミュージアムにはたくさんの遺品が展示されています。そしてその一つ一つにドラマがあります。私を含めて戦後生まれの者にとって戦争の悲惨さや理不尽さを本当に実感するのは難しいことです。沖縄戦のコーナーでは特に銃後を守った人たち（一般の人たち）に戦争は一体何をもたらしたのかを見学者と共に考えるようにしています。見学者が当時の人や事件に思いを馳せることができるような発問を考え、見学者の想像力を掻き立てるガイドを目指したいです。「この時代に生まれてなくてよかった」という他人事の感想に終わらない‘何か’をつかんで欲しいのです。

（ボランティアガイド：小野房子）



吉坂正氏遺言 1945年7月

地階常設展　「時局防空必携」「待避所の作り方」

戦争がはじまると、状況がひっ迫する前から空襲に対する対策は進められていました。1937（昭和12）年に防空法が制定され、国民は防空訓練への参加や灯火管制などが義務付けられ、違反者には罰則も存在しました。しかし、防空法は国家体制の維持を目的にしていたため、国民の命や財産を守るという視点は薄く、戦争が激しくなるにつれ身を挺して国家を守る責務の面が強調されていきました。

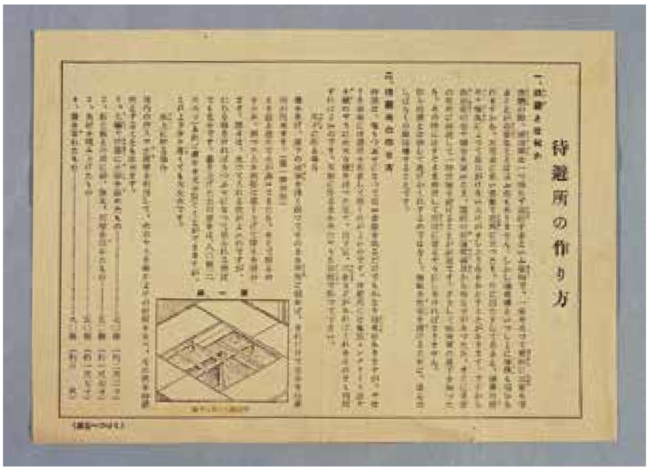
防空活動については民間からも解説書が多く発行されました。しかし、1941年に内務省から政府公認の防空マニュアルともいえる「防空必携」が発行されると、類似書の発行が戒められました。対応の統一と言えば聞こえはいいですが、空襲を恐れて逃げ出し、戦争協力の気運が下がることを懸念してのことでした。「防空必携」で強調されていたのは、身の守り方ではなく、爆弾の炎に恐れず立ち向かうことでした。日頃から準備し、訓練を積んでおけば爆弾の火は簡単に消火できる。改定のたびにそうした精神論的な記載が増えていきました。

空襲が現実のものとなると、政府は各家庭の床下に簡素な防空壕を作ることを推奨しました。空襲時、国民は逃げずに消火活動にあたるのが原則だったので、家に爆弾が落ちたらすぐに駆けつけられる床下が適切とされたためです。この防空壕は逃げ込むためのものではなく、消火活動のため、飛行機が通り過ぎるまでの間一時的に待機する場所とされたため、‘退避’ではなく‘待避所’の呼称があてられました。しかしながら、訓練通りの“待避”により、建物の倒壊に巻き込まれたり、酸素不足による窒息など、多くの人々が亡くなりました。

（学芸員：篠田祐磨）

参考文献：水島朝穂、大前治『検証防空法　空襲下で禁じられた避難』法律文化社、2014年

時局防空必携 1943年



待避所の作り方 1940年代前半

国際平和ミュージアムは、リニューアル工事のため、2021年４月１日㊍～2023年９月まで休館を予定しています。
リニューアルオープン日程については、詳細が決まり次第、HP等でお知らせいたします。

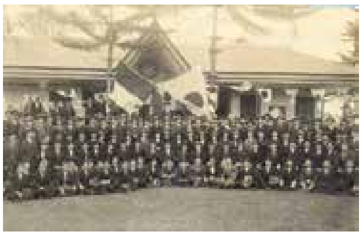
ミニ企画展示

第136回「おなじ太陽のもとで —ペルーへ日本人移民の始まり—」

会期 2021年1月9日㊏～1月30日㊏

主催：APEJA（日本ペルー学術協会）、在名古屋ペルー総領事館、APJ（ペルー日系人協会）

展示内容 ペルーへの日本人移民のはじまりや、移民たちが現地へ適応するための創意工夫、両国間の関係への影響について伝える写真展です。当時とおなじ太陽の下、夢と希望を持って日本に移住するペルー人がいる今、この展示が日本人と日本に住む外国人が良い関係を築くためのヒントとなることを願い開催します。


ペルー独立記念日の祭

第137回「学徒出陣　林尹夫(タダオ)をさがして—1943-2021」

会期 2021年2月6日㊏～3月21日㊐

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

展示内容 1943年、15年戦争は激しさを増し、それまで徴兵が延期されていた主に文科系の大学生、高等専門学校生も軍隊へと招集されることが決定されました。世にいう「学徒出陣」です。これは、学問の徒であることを希求しながら、生きる道を閉ざされた一人の大学生と、彼が残した４冊のノートをめぐる展覧会です。（本展は第25回京都ミュージアムロード参加企画です。）

徴兵検査後の林尹夫（右）

遊心雑記

手品と平和博物館

安斎　育郎（国際平和ミュージアム名誉館長）

「手品とは常識の虚をつく錯覚美化の技芸である」。ずっと昔に、そう学びました。手品歴はもう70年近くになります。大学時代は奇術愛好会の会長でした。手品は人々の思い込みの隙間をついて錯覚を誘導し、「事実でないこと」を「事実である」かのように感じさせます。しかも、楽しく美しく。

実は、私たちの社会生活の中でも似たようなことがあります。ある政策を実行するために「不都合な事実を隠して、好都合な情報をことさらに強調し、政策誘導を図る」というようなことになると、大変深刻ですが、原子力を専門とする私の経験の中にも、原発政策でも似たようなことがあったなぁと感じます。こうした政策誘導は、とりわけ戦時にはありがちなことですが、恐ろしいことです。

2008年に立命館で開いた第６回国際平和博物館会議に、私は「国境なき手品師団」（Magicians Without Borders）の創設者トーマス・ヴァーナーさん夫妻を招きました。平和を訴える手段の一つとして、手品が有効であることをアピールしてもらうためです。フェアウエル・パーティでは私自身も手品を演じましたが、ヴァーナーさんに「私も国境なき手品師団の一員と名乗っていいか？」と聞いたら、「あなたは名誉会員だ」というお答えでしたので、以来私はそう名乗っています。

2020年９月、私は「平和のための博物館国際ネットワーク」（INMP）のジェネラル・コーディネータとして、国際平和ミュージアムの吾郷眞一館長ともども、第10回国際平和博物館会議のオンライン開催に取り組みました。そして、閉会のビデオ・メッセージで写真のような手品を実演し、「ハンカチは自在に取り出したり消したりできるが、平和はそう簡単にはいかない」と切り出し、「異なる文化的背景や価値観をもつ人々との共同こそが平和をつくる力になる」と結びました。海外のINMP役員からは「面白かったよ」というメッセージが来ました。

マジックを演じる筆者

■ミュージアム概要■

開館時間： 10:00～12:00（入館は11:30まで）
13:00～15:00（入館は14:30まで）
消毒等の実施のため、12:00～13:00は一旦退館をお願いいたします。
当日の再入館時の見学資料費はいただきません。

休 館 日： 日曜日及び、祝日の翌日（日曜日が祝日の場合は開館、翌日が休館）
年末年始、3月28日（日）～3月31日（水）、
リニューアル休館日2021年4月1日（木）～2023年9月迄

見学資料費（入館料）： 大人400円、中・高生300円、小学生200円

新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う開館に関する対応について

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、今後の展示・イベント企画を急遽延期もしくは中止させていただく可能性がございます。詳細は随時ホームページやTwitterにてご確認ください。

立命館大学国際平和ミュージアムだより

立命館大学
国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University

第28巻 第２号（通巻82号）2021年１月15日発行
編集・発行　立命館大学国際平和ミュージアム
〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1
TEL：075-465-8151 / FAX：075-465-7899
https://www.ritsumeikan-wp-museum.jp/

日本平和博物館会議

今後、当館の取り組みのご案内、ミュージアムだより等、当館より送付をご希望されない場合、また、送付先の住所変更等ございましたら、氏名・団体名、送付先住所、電話番号、FAX番号をご記入の上、国際平和ミュージアム（075-465-7899）へFAX送信ください。